

3. 38年間入院生活を送り老年期になって退院できた患者の事例を通して

○ 矢野 敬子, 木村 洋子, 福水 由樹子 (揖保川病院), 木村 美智子 (関西福祉大学)

I. はじめに

入院が長期にわたる精神障害者の退院促進は、2004年の厚労省の「精神保健医療福祉の改革ビジョン」の中で、「入院医療中心から地域中心」へと長期入院患者の地域移行の施策が進められてきた。しかし、現実には長期入院の精神障害者への退院促進は困難な状況で、特に入院期間が5年以上が65歳以上の精神障害者は困難であることが示唆されている。こうした状況の中、I病院に38年間入院し、退院の話題になると「病院に死ぬまでいる」と、話していたA氏が退院することができた。なぜ38年間入院したA氏が老年期になって退院することができたのか、とチームで考える機会となった。

II. 研究目的

退院を拒否していたA氏に対して、どのような関わりが退院への意欲につながったかを明らかにすることを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン：事例研究
2. 研究対象：I病院に38年間入院の60才代の男性A氏
3. データ収集と分析：A氏の入院から退院までの期間を日常生活、看護師や他者との関わり、退院に対する患者の変化をカルテから情報を抽出し、退院へと結びついた要因を分析する。
4. 倫理的配慮：I病院の倫理審査委員会の承認を得て行った。対象者に対しては研究の目的・方法について説明した。また、研究への参加が任意であることと途中で拒否でき、中止できること。さらに、知り得た情報は研究目的以外には使用しないこと、匿名を遵守することを口頭と書面で説明し同意を得た。

IV. 退院に向けての働きかけと結果

長期入院になってしまった要因として①時代的背景 ②支援する家族の不在がある。そこで、患者の視点からどうすべきか考えることにした。看護職員だけではなく、多職種との協力体制を整え、患者の意思を尊重しながら働きかけを行った。その結果、拒否していた施設への見学にも「行ってみる」などの言葉が聞かれ、変化がみられるようになってきた。退院にいたった理由として①退院にむけて本人を中心に院内における多職種の支援体制 ②C市職員のかかわり ③D施設（A氏の故郷にある）で暮らすかつての仲間の存在 ④本人が自分で話をきき、見学をし、自己決定できたことなどがあった。

V. おわりに

今回の事例を通して、患者の立場に立つこと、丁寧なチームでのかかわりが長期入院の精神障害者の退院への意欲につながったことが明らかになった。